

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月7日現在

機関番号：13101  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2009～2011  
 課題番号：21531013  
 研究課題名（和文） 広汎性発達障害者のソーシャルスキル認識の解明と自己評価プログラムの開発  
 研究課題名（英文） The elucidation of pervasive developmental disorder person's social skill recognition and development of the social skill program  
 研究代表者  
 長澤 正樹（NAGASAWA MASAKI）  
 新潟大学・人文社会・教育科学系・教授  
 研究者番号：30293187

研究成果の概要（和文）：広汎性発達障害者を対象に、彼らが自身のソーシャルスキルをどのように認識しているかを明らかにするとともに、広汎性発達障害の特性に対応し、自己認知・自己修正を可能にするソーシャルスキルの改善のためのプログラムについて検討を行った。結果はソーシャルスキル尺度とセルフモニタリング尺度の得点に有意な相関が認められた。また、セルフモニタリング手続きを導入したところ、ソーシャルスキルは改善した。ただし、変容の条件として、具体的に修正すべきソーシャルスキルについて明示しておく必要があることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This research investigated how the pervasive developmental disorder person would recognize about own social skill. Furthermore, we examined whether they could do self-correction of social skill by self-monitoring procedure. As a result, significant correlation was found between the scores of a social skill measure and a self-monitoring measure. Moreover, self-monitoring procedure showed the effect to the improvement of social skill. However, it was suggested that the social skill which should be corrected concretely needs to be specified.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学  
 科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：高機能広汎性発達障害・自己評価・就労支援・ソーシャルスキル

### 1. 研究開始当初の背景

中村・長澤(2008)は、青年期の広汎性発達障害者に対し、対人関係の困難さが、自身の特性であることに気づかせるため、集団活動における自らのソーシャルスキルの状態をチェックリストを使いながら自己評価させた。すると、集団適応に必要なソーシャルスキルが改善したことを明らかにした。しかしながら、この研究における手続きには自身の障害特性、あるいは行動上の課題を、客観的に自己認識しながら自己修正しているのではなく、スタッフからのフィードバックが行動修正の手かがりとなっていた可能性があった。すなわち、厳密にスキルを自己認識し、自己評価したうえで修正課題を自ら設定できていたのか、単に他者評価に追随した結果、行動修正できたのかが不明であった。他者からのフィードバックによる修正ではなく、自身の行動をセルフモニタリングすることで適切なソーシャルスキルの獲得が可能であるのかその有効性について検討が必要である。

### 2. 研究の目的

本研究では、以下の点を明らかにすることを目的とする。

(1)研究1では、知的障害を伴わない青年期広汎性発達障害者を対象に、彼らが自身のソーシャルスキルをどのように認識しているかを明らかにする。

(2)研究2では、知的障害を伴わない青年期広汎性発達障害者を対象にソーシャルスキルの自己修正における、ビデオモニタリング、セルフモニタリング、自己教示手続きの有効性の検討を行う。

(3)研究3では、知的障害を伴わない青年期広汎性発達障害者を対象にビデオモニタリ

ング、セルフモニタリング、応用行動分析学に基づく行動の自己分析で構成された一連の手続きをプログラム化し、それを提供し、ソーシャルスキルの自己修正における有効性を検討する。

### 3. 研究の方法

#### 参加者

研究1,2には13名の参加があった。参加者のそれぞれのプロフィールについては下記の通りであった。

Table 1 参加者のプロフィール

参加者	性別	年齢	診断	診断時の年齢	
				互行による診断	診断時の年齢
A	男	35	アスペルガー症候群		30歳
B	女	28	アスペルガー症候群		17歳
C	男	16	広汎性発達障害		15歳
D	男	16	アスペルガー症候群、注意欠陥/多動症、書、トラレット症候群		9歳
E	男	18	アスペルガー症候群		11歳
F	男	17	広汎性発達障害		11歳
G	男	17	アスペルガー症候群		11歳
H	男	16	広汎性発達障害		11歳
I	男	25	アスペルガー症候群		20歳
J	男	19	広汎性発達障害		14歳
K	男	16	自閉症		9歳
L	女	14	広汎性発達障害		15歳
M	男	19	アスペルガー症候群		14歳
平均		19.92			14.6歳
標準偏差(SD)		5.56			6.89

Table 2 WAIS-IIIの結果

参加者	IQ			知能指数			
	言語IQ	動作IQ	合計IQ	言語理解	知覚統合	行動転換	処理速度
A	115	76	95	122	85	74	81
B	118	106	114	108	105	105	105
C	65	64	69	61	68	69	60
D	92	90	90	107	95	72	78
E	139	122	129	131	121	107	97
F	70	63	74	62	91	67	72
G	78	64	69	68	66	67	66
H	78	79	76	66	72	74	84
I	98	67	81	98	68	100	54
J	89	91	83	90	98	82	100
K	105	67	97	111	65	68	72
L	87	85	85	85	77	82	114
M	117	90	106	118	97	107	81
平均	90.54	86.46	90.05	99.81	89.06	82.82	81.35
標準偏差(SD)	20.84	15.16	16.15	19.59	15.86	16.79	17.91

\*参加者のみWISC-IIIを実施。

研究3には3名の参加者があった。参加者のそれぞれのプロフィールは下記の通りであった。

(1)研究1では、参加者のソーシャルスキルと自己モニタリングの特徴、心理的ストレス反応との関係について検討を行った。

Table 3 参加者のプロフィール

参加者	性別	年齢	診 断	
			医師による診断	診断時の年齢
N	女	19	広汎性発達障害	3歳
O	男	17	アスペルガー症候群	10歳
P	女	12	広汎性発達障害	12歳

Table 4 WAIS-

参加者	IQ			群指数			
	言語性IQ	動作性IQ	全検査	言語理解	知覚統合	作動記憶	処理速度
N	111	112	112	124	116	74	86
O	101	86	94	99	79	107	116

Table 5 WISC- の結果

参加者	言語理解	知覚推理	全検査	メモリー	処理速度
P	90	89	85	97	78

ソーシャルスキルについては、質問紙による評価(Kikuchi's Scale of Social Skills:18 items:KiSS18)と、障害者職業総合センター(2008)が示した、「発達障害者のワークシステム・サポートプログラム」を基にシミュレーション場面を設定し、そこでの実際の行動の様子を観察し、評定した。

自己モニタリング能力については「レノックス & ウォルフ版改訂版セルフモニタリング尺度」(岩淵・田中・中里, 1982; 岩淵, 2003; 藤岡・高橋, 2008)への回答を求めた。さらに実際の社会的場面における心理的ストレス反応を新名・坂田・矢富・本間(1990)の「心理的ストレス反応尺度(Psychological Stress Response Seale: PSRS)」により測定した。それぞれのデータとの関係については、すべての組み合わせで相関係数を算出し、相関があったものは無相関検定を行った。

(2)研究2では参加者が誤反応の多かったシミュレーション場面において、以下の2つの条件(条件1・2)下で、自己修正が可能であるか検討を行った。

#### 1)条件1:ビデオモニタリング条件

参加者5名A、C、D、F、Lがこの条件に参加した。この条件では、自身のソーシャルスキル行動をビデオ記録から観察し、その後の行動変容が見られるか観察した。

2)条件2:ビデオモニタリングとセルフモニタリング、自己教示手続きの併用条件

参加者4名E、G、H、Kがこの条件に参加した。この条件ではセルフモニタリング手続きである自身の行動の「観察」と「記録」と、これに「自己教示」の手続きも導入した。

(3)研究3では、知的障害を伴わない広汎性発達障害者男女3名に対し、ビデオモニタリング、セルフモニタリング、応用行動分析学に基づく行動の自己分析で構成された一連の手続きをプログラム化したものを提供し、第三者からの行動修正の手続きを一切加えない中でスキル改善を行う事が可能かどうか検討を行った。

#### 4. 研究成果

(1)研究1の結果は「ソーシャルスキル尺度(Kikuchi's Scale of Social Skills:18 items:KiSS18)」の得点と「セルフモニタリング尺度(レノックス & ウォルフ版改訂版セルフモニタリング尺度)」の得点について相関が認められた。また無相関検定の結果有意であり、さらに偏相関分析により、想定される制御変数の影響を考慮しても、依然としてこれらの尺度得点との間には高い相関が認められていた。

そのほかの関係についても、相関は認められていたものはあったが、無相関検定の結果有意でなかった。

(2)研究2のそれぞれの条件での結果は以下の通りである。

Table6 KiSS-18とレノックス & ウォルフ版改訂版セルフモニタリング尺度のPearsonの相関係数と無相関検定の結果

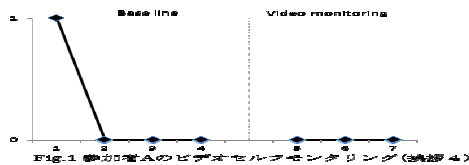
		セルフモニタリング尺度	Kiss18ソーシャルスキル尺度
Kiss18ソーシャルスキル尺度	Pearsonの相関係数	-	.750**
	有意確率(両側)		.003
レノックス & ウォルフ版改訂版セルフモニタリング尺度	Pearsonの相関係数	.750**	-
	有意確率(両側)	.003	

#### 1)ビデオモニタリングのみによる条件

ビデオモニタリングのみによる条件での、ソーシャルスキルの変容の様子を以下に示した。

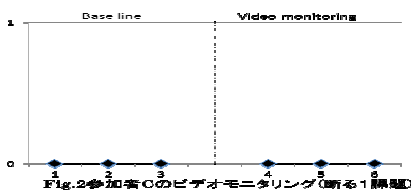
対象者 A の結果

対象者 A の結果を Fig.1 に示した。「挨拶」課題を実施した。なお Fig の縦軸「1」は「正反応」を示しており「0」は「誤反応」を示している(以下の Fig もすべて同様)。



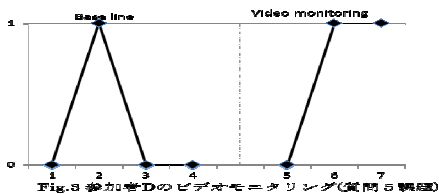
対象者 C の結果

対象 C の結果を Fig.2 に示した。「断る」課題を実施した。



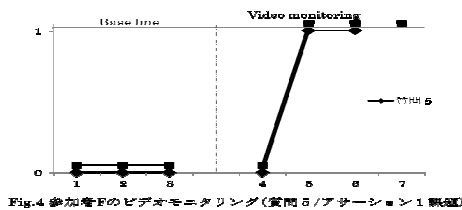
対象者 D の結果

参加者 D の結果を Fig.3 に示した。「質問」課題を実施した



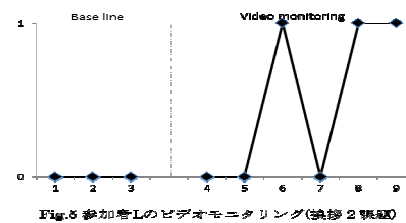
対象者 F の結果

参加者 F の結果を Fig.4 に示した。「質問」課題、「アサーション」課題を行った。



対象者 L の結果

参加者 L の結果を Fig.5 に示した。「挨拶」課題について行った。

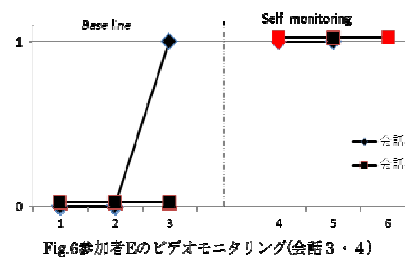


2)ビデオモニタリングとセルフモニタリング、自己教示の併用条件

それぞれの参加者のビデオモニタリングとセルフモニタリング、自己教示の手続きを併用した条件の課題遂行の結果を以下に示した。なお介入期以降に赤でプロットされた試行についてはビデオ記録のために自身でスイッチが押された試行である。

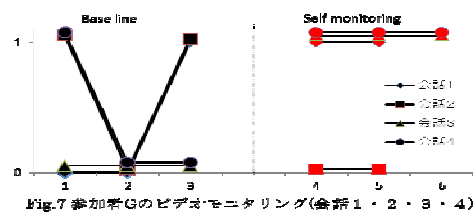
参加者 E の結果

参加者 E の結果を Fig.6 に示した。「会話 3」「会話 4」課題を行った。



参加者 G の結果

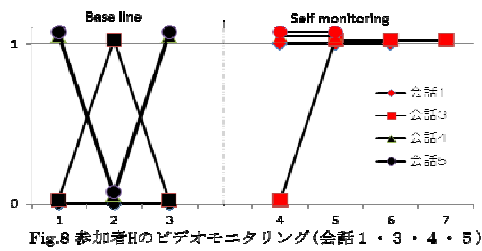
参加者 G の結果を Fig.7 に示した。会話 1」「会話 2」「会話 3」「会話 4」課題について行った。



参加者 H の結果

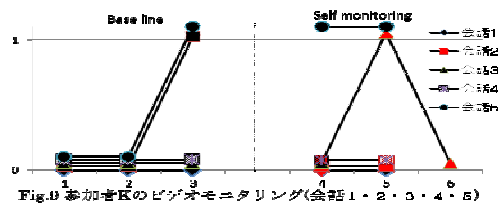
参加者 H の結果について Fig.8 に示した。「会話 1」「会話 3」「会話 4」「会話 5」

課題を行った。



参加者 K の結果

参加者 K の結果を Fig.9 に示した。会話 1」「会話 2」「会話 3」「会話 4」「会話 5」課題について行った。



(3) 研究 3 の結果は以下の通りである。

1)セルフモニタリングによるソーシャルスキルの変容結果

ソーシャルスキルの自己評価の事前評価・事後評価の結果を自己評価とし、Fig.10, Fig.12, Fig.14 に示した。また参加者それぞれのソーシャルスキルの評価を他者評価とし、Fig.11, Fig.13, Fig.15 に示した。

2)KiSS-18 の事前評価時・事後評価時の変化

参加者 N,O,P のソーシャルスキルの自己評価尺度である KiSS-18(Kikuchi 's Scale of Social Skills: 18 items)(菊地,1988)の事前評価時・事後評価時の結果を Fig.16 に示した。

3)心理的ストレス反応尺度の事前評価時・事後評価時の変化

参加者 N,O,P の心理的ストレス反応尺度 (Psychological Stress Response Seale : PSRS) (新名・坂田・矢富・本間,1990) 下位

項目「認知・行動的反応」の「不安」の事前評価時・事後評価時の結果を Fig.17 に示した。

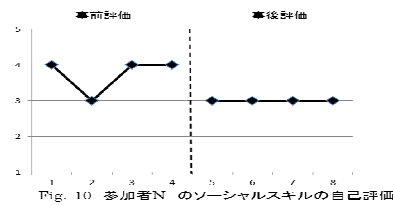


Fig. 10 参加者 N のソーシャルスキルの自己評価

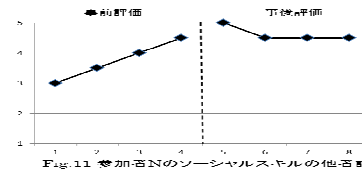


Fig. 11 参加者 N のソーシャルスキルの他者評価

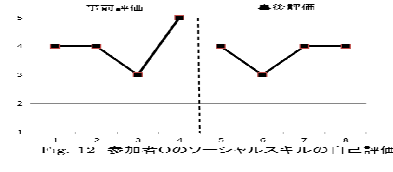


Fig. 12 参加者 O のソーシャルスキルの自己評価

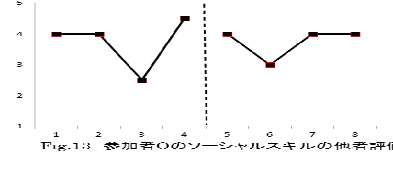


Fig. 13 参加者 O のソーシャルスキルの他者評価

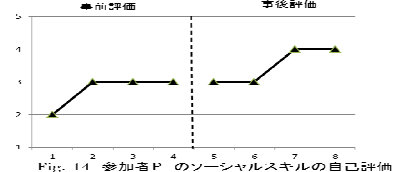


Fig. 14 参加者 D のソーシャルスキルの自己評価

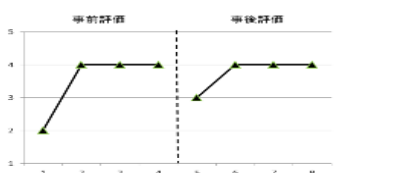


Fig. 15 参加者 P のソーシャルスキルの他者評価

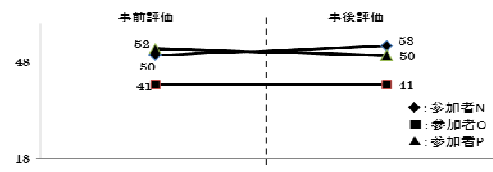


Fig. 16 参加者 N・O・P の KiSS-18 変化

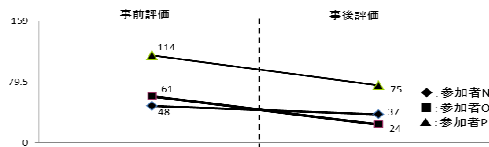


Fig. 17 参加者N・O・Pの心理的ストレス反応尺度変化

以上の結果からソーシャルスキル尺度とセルフモニタリング尺度の得点に有意な相関が認められた。また、ビデオモニタリング手続きのみでは効果が乏しかったものの、セルフモニタリング手続きを導入したところ、ソーシャルスキルは改善した。ただし、変容の条件としては、自己分析をすることよりも、具体的にどのように修正すべきか自己教示をしてから課題にのぞむ必要があることが示唆された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計1件)

伊藤真理・有川宏幸「青年期広汎性発達障害者のソーシャルスキルトレーニングの自己認識に関する研究」.第49回日本特殊教育学会.平成23年9月25日.弘前大学.

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

長澤 正樹(NAGASAWA MASAKI)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授  
研究者番号:30293187

(2)研究分担者

有川 宏幸(ARIKAWA HIROYUKI)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授  
研究者番号:80444181

(3)連携研究者

なし